



第 50 号 (年 4 回発行) 編集発行 弘学時報 前学委員 弘学時報 印刷所 (有)小野印刷所

2012年

クリスマス礼拝と音楽の夕べ開催

12月13日、本学礼拝堂において、クリスマス礼拝が行われました。厳肅な雰囲気の中、多くの教職員・学生が集い、パイプオルガンや清らかなハンドベルの音に包まれながら、キャンドルを灯し、青森松原教会の大澤求牧師による「この喜ばしい知らせ」と題してメッセージをいただきました。イエスキリスト

の降誕を共に賛美し祝うことができました。 また、この夜6時30分より、第13回目の「クリスマス音楽の夕べ」が開催されました。

ハンドベルの清らかな音色によって音楽会の幕が開き、楊尚真宗主任が聖書朗読と祈禱をされました。第一部は今廣志さんによるサクソフオーンの独奏、コール・コモードの女声合唱による、本学の笹森建英教授作曲の『乙女の四季』が歌われました。この曲は、作曲者が若き日に近所の少女が読んでいた『サトウ・ハチローの詩集』を借りて、連作作曲したもので、今回の演奏のために合唱曲に作り直されたものです。詩情と感傷的なメロディーが聴衆を魅



第二部は、竹佐古真希さんによるパイプオルガンの独奏、続いて今廣志さんのサクソフオーン四重奏「クリスマス曲メロデー」などが演奏され、聴衆をウキウキと楽しませてくれました。



「きよしこの夜」を賛美し、イエスキリストのご降誕をお祝いしました。(宗教部・大坊)

本多庸一とキリスト教 (2)

井上に対するキリスト者の反論

学校法人弘前学院 理事長 阿保 邦弘



この攻撃に対して、キリスト

教側も激しい論陣を張って応戦した。本多庸一、内村鑑三、高橋五郎、小崎弘道、植村正久、横井時雄、大西祝、柏井義園、山路愛山等があるが、その多くはキリスト教は決して教育勸語が示す道徳と相反するものではないこと、それが衝突すると考

えるのは、キリスト教の本質についての無知に基づく皮相な見方に基づかないことをその論旨としたものであった。 真つ先に反論を発表した本多は、井上哲次郎の論点一つ一つについて詳細な反論を試みたのち、つぎのようにむすんでいる。「要するに、学問として、基督教の書籍を読むと、己が信仰としてこれを実際に応用するところには、その浅深死活の差甚だしき者あり、何の宗教もしから

男女共同参画社会

学長 吉岡 利忠



先ず初めに、弘前学院大学から年4回季発行している「弘学時報」の第49号(前号)は、本学と米国3大学、中国2大学留学センターおよび韓国2大学校と姉妹校を提携した記事を載せた特集号として学生、教職員、諸先輩、本学関係者に配布された。特に、本学学生には実践的国際感覚を身につけるため積極的に海外に飛び出し、留学や語学研修、異文化体験をして欲しいと考

え、敢えてこの号にこれまでに協定した7教育機関を纏めたものである。本学生にはこのような貴重なチャンスが目の前にあるということを確認して欲しい。また、本学を卒業し全国で支部会を作り活躍している諸先輩方々には、本学が最も力を入れている事業の一つである国際交流について広く知って頂きたいという意味も込められている。 さて、この第50号ではタイト

ルにあるようにさまざまな現場において活躍している。特に女性の社会における活動について記載してみよう。 弘前学院の長い歴史を辿ってみると弘前女子校の創立以来女子教育が原点であることは多くの教育史、書籍、論文、その他の書類でよく目にするところである。弘前学院によって教育を受けた女子の社会への浸透そして活発な行動は、この地方のみならず全国にあつて誇れるものである。短期大学時代を含め高等教育機関である弘前学院大学から果だつて行った女子先輩の活躍・業績を見聞するたびに、今後の卒業生には大いに期待するものである。

手始めに弘前学院大学入学生比率を見てみよう。結果を表1に示す。2005(平成17)年から8年間のデータであり、この年、看護学部が発足した平均して女子学生は64%を占め、男子学生では36%になる。圧倒的に女子学生の入学生が多いが、昨年は男子学生が4割を占めるようになった。女子数が6割強であることはやはり女子教育機

関として歴史を踏んできた背景がある。次に、職場として見た場合はどうであろうか。弘前学院本部を含めた男女比を調べると、全教職員(含中学・高校)の女性の比率は43・6%となった。内訳では教員で41・2%、職員で51・3%となり、やはり女性の比率が高いことが分かる。我が国の多くの企業や職場において、どちらかと言うと男性の比率が高い。弘前学院では半々と云っていいだろう。それだけ、いわゆる男女共同参画社会を形成していることになる。 歴史を見ると、1986(昭和61)年には男女雇用機会均等法が施行され、その後も改正を重ねられてきている。最近、少子高齢化が叫ばれ、ゆくゆくは労働力人口の減少が懸念される背景から社会における女性の活躍が求められている。1999(平成11)年に男女共同参画社会基本法が施行され10余年が経過し、2012(平成24)年12月には第3次同計画が策定された。21世紀は「人権の世紀」とも言われ我が国の最重要課題として位置づけられている。国の目標政策として、2020(平成32)年までには指導

た。ところがこの時に限って彼はキリスト教陣営の先頭に立って論陣を張っている。これは彼がことの重大性をいち早く見抜いたからに他ならない。山地愛山は井上哲次郎を「思想界の節物師(キワモノ)シ」その時の流行に投ずる事業だけを企てる人」であつて学問的にも人物においても信頼できないと批判したうえで、当時の状態について「大学教授たり売り出しの博士たりドイツ仕込みの学者たりて

ふ氏の名声と、国民的反動思想の潮流とは、此論文に虎の翼を加えたり。教育家の大部分は此論文をもつてあかも金科玉条の如く見做し盛んに反キリスト教の感情を燃したり」とのべているが、歴史的にこの論争全体を見た場合、それはキリスト教の人間像描写から見落としてはならない点であろう。そして、これがよく言われる本多の政治家的資質の最もすぐれた一面であつたと言つてよいであろう。(以下次号)

表1 新入生女子学生比率

年	女
2005(平成17)年	64.0%
2006(平成18)年	62.3%
2007(平成19)年	65.4%
2008(平成20)年	62.7%
2009(平成21)年	62.4%
2010(平成22)年	68.7%
2011(平成23)年	68.7%
2012(平成24)年	60.1%

研究紹介⑩

妊娠経過に伴う妊婦の

視界の変化に関する研究



看護学部 講師 工藤 優子

妊婦は、妊娠後期に「おなか

が大きく膨らんできましたので足

元にご注意しましょう」と、妊婦

健康の際に保健指導を受けま

す。しかし、妊娠経過に伴って

腹部は突出しますがいつごろか

ら、どのくらい足元が見えない

のか明らかでなく、助産師が行

う保健指導は経験的なものであ

談話室

弘前紅の国・虹の国



社会福祉学部 拓殖 秀通

弘前という土地には、土地の

人たちにはあまりにも当たり前

であるのに、外から来た人間に

とっては、きわめて珍しい、そ

して非常に心惹かれるものが

多々あります。私は、弘前に来

て7年たちますが、今でもやは

り驚きを感じるがあります。

それは、特に四季の移り変わり

の中にあらわれています。

春の桜、その美しさ、特に弘

前城の桜のトンネルの美しさ、

花筏の美しさはあまりにも有名

ですが、我々外から来た人間に

とっては、春の桜以上に秋の桜

に心惹かれます。最初に、それ

から40数年見てきた虹の数よ

とほとんど差がなく、妊婦は

徐々に突出する腹部に順応して

いるためと考えられました。さ

らに、非妊娠女性および妊婦の

協力を得て実験研究を行って

います。眼球運動測定装置アイ

を聞いたときはわが耳を疑いま

した。「え、ありえない」とい

うのが率直な感想です。すなわ

ち、桜の紅葉です。特に弘前城

の桜の紅葉の美しさはたとえよ

うのないところですよ。

我々関東以南の人間にとって

桜は、花が咲き、青葉となって

後は枯れ落ちるのみの存在です

ところが、弘前の桜は、青葉の

後、得も言われぬ透明な紅を、

我々に見せてくれます。その紅

文学フォーラム

本学地域総合文化研究所では

毎年、三学部の教員が各々の領

域で講演やシンポジウムなど

企画している。従来は学外の識

者に講演等を依頼することが多

かったが、文学部では今年度か

らの新たな試みとして、「文学

フォーラム」と題し、本学教員

の研究や教育の内容を一般向け

にわかりやすく発信することを

狙いとして、パネルフォーラム

の開催を企画した。弘前、津軽

第8回看護学部

リカレント教育を終えて

看護学部講師 齋藤美紀子

看護学部主催のリカレント教

育は、平成二十一年から「臨床

実践に役立つ看護研究」をテー

マとして毎年3回のプログラム

で実施してきました。今年度は

要望の多かったパソコンでの

データ処理演習を初級者コース

と中級者以上コースの2つに分

け、全4回のプログラムで実施

しました。また、より具体的な

研究のノウハウに焦点を絞って

きたと考えています。

虹でした。

まったく、弘前というところ

は、人の心を揺さぶる風景に事

欠きません。このような豊かな

情景に心満たされながら過ごす

日々感謝をしています。(ま

あ、ただ一つ、風景としてはき

れいですが、雪だけはもう少し

少なくってほしいものですよ

が)

ないし北東北に何らかの形で関

わる共通テーマを設定しなが

ら、英語英米文学科・日本語日

本文学科・共通教養という三領

域にわたる教員が揃う本学文学

部の人的資源を生かし、各領域

が、臨床での看護研究の意義を

知ることができ、文献検索の実

際的な方法を学ぶことができた

と良好な反応を得られました。

2回目は査読者の視点からみ

た論文作成のコツと、データ処

理演習の初級者コースを行い、

3回目は、質問紙法によるデー

タ収集と分析方法、データ処理

演習の中級者以上コースを行

いました。データ処理演習は毎年

大変希望者が多く、パソコンを

用いたデータの整理・分析方

法について、地域の看護師の皆

さんのニーズが高いことを裏付

けていたと思います。

最終の4回目は、毎年講師を

お願いしている岩手県立大学看

護学部の福島裕子先生の「研究

論文のまとめ方」でした。大変

興味深くわかりやすい説明で、

受講者の皆さんに大好評でし

た。

終了後の受講者のアンケート

結果によると、プログラムが

「大変有意義であった」「有意義

であった」という回答がどの回

でも8割を超えており、概ね受講

者の皆さんのニーズに合った内

容が提供できたのではないかと

思います。感想の中には「学生

でなければ習えない、時代の流

れにあった、このような内容の

研修は、社会人になってからも

必要だと痛感していますので今

後も続けて欲しい」とあり、リ

カレント教育の目的にまさにか

なつた意見をいただきました。

また、「開催日時の間隔をあま

り空けない方がよい」、「毎回同

じところからのスタートではな

く、進んでいくプログラムにし

てほしい」という意欲的な意見

もいただき、次年度の計画立案

の参考にしたいと思います。

リカレント教育を通して、弘

前学院大学看護学部が行ってい

る地域貢献について広く知って

もらい、今後も大学というリ

ソースを是非地域の看護職の皆

さんに活用していただければと

願っています。

概要は別途活字化して地域総

合文化研究所から公開する予定

である。

スタッフと聴衆の皆様のお力

添えとお支えがあって、当日は

盛会のうちに会を終えることが

出来た。今回お聞き逃しになつ

た方も、来年度は是非会場まで

足をお運び下さい。

(文責 三浦一朗)

「緩和の集い」に参加して

看護学部 四年 門脇ひかる

平成二十四年十月六日、ときわ会病院「緩和ケア病棟」の開設五周年を記念して「緩和の集い」が開催された。医療関係者、多数の一般の方々、そして本学の看護学部学生も参加し、心温まる集いとなった。



「緩和ケア」は、病気に関連する痛みや様々な苦痛を予防・緩和することによって、患者と家族の「生活の質」を改善することを目的としている。「緩和ケア病棟」では、主ががんの患者を対象として、がん治療は行わないが、患者と家族の意向を尊重して痛みや症状を緩和する治療やケアを行なっている。青森県内では、青森市の青森慈恵会病院と藤崎町のときわ会病院が「緩和ケア病棟」を開設している。「緩和の集い」に参加して大きな学びを得た学生の感想を紹介する。

今までは癌は早期発見、早期治療を行えば治ると思う反面、家族が癌を患っていたので癌はとて怖い病気というイメージが強くなりました。しかし、緩和の集いで「癌になってから死ぬまでに時間がある」「緩和ケアを利用して死を見つめる」「家族と患者が対話することが出来る」という話を聞き、私の中の癌に対するイメージが大きく変わりました。そして、緩和ケア病棟は「生活する場」であることを知り、「その人がどのように暮らしたいか」を可能にすることが、「最後までその人らしく過ごしていけることになる」と思いました。



看護学部 四年 藤原 桃子

緩和ケアと聞くと、「死が近い、もう先がないから少しでも苦痛を軽減し、安楽な死を自分で受け止めて、病院や在宅で最後を看取るために行われる援助」と思いました。また、患者や家族は治療につ

第3回 英語弁論大会開催

文学部 英語・英米文学科長 佐藤 和博

去る11月15日、11時15分から、弘前学院礼拝堂にて第3回英語弁論大会が開催されました。

弘前学院大学英語英米文学会主催「この大会の目的は、第一に本学学生の英語能力(会話力、文法、文章力)を向上させる事であり、第二に、多くの学生が英語学習に励み、より高いレベルの英語能力を身につける事。また発表者が与えられた課題に対する考えを深め、その考えを分かち合い共に学ぶ事にあ

ります。今年度は「自由課題」により、大学院生から学部1年生まで、8名の学生が日頃の成果を競いました。各自4分から5分の持ち時間のなかで、出場者はベストをつくして発表しました。

本学チャブレン楊尚眞先生及び、本学



非常勤講師アルヴァル・ヒューゴン先生が審査委員として、出場者のスピーチを採点しました。審査基準としては、内容、

青森県初の自主上映会

「むかしMattoの町があった」を開催し

社会福祉学部 准教授 葛西 久志

去る1月20日に、津軽地域精神障がい者社会復帰支援連絡会主催(会長清藤尊子「社会福祉学部 一期生」)により、本学の講義室でイタリア精神保健改革で有名な「バザリア法」を描いた映画の上映会を行った。

入場者は、総勢70名で、精神科病院のスタッフはじめ当事者、本学学生、弘大医学部生や、一般市民など様々な人たちが視聴し感動した。

さて、映画の邦題にある「Matto」とはイタリア語で狂気をもつ人、すなわち「Mattoの町」とは、精神科病院を意味するのである。

この映画の主人公であるフランコ・バザリア氏は、一九七八年に精神科病院への新規入院

の禁止や再入院の禁止など通称バザリア法(病院閉鎖)の制定に尽力した人物である。映画に出てきた北イタリアのトリエステにあるサン・ジョバンニ精神科病院は約6万坪の敷地に、入院患者一〇五八人(うち八四〇人が強制入院、おり、医師十人、看護師三五三人で治療に当たっていた。しかし、治療の中心は人ではなく拘束衣と薬であった。

バザリア氏は、「自由こそ治療だ」を合言葉に精神医療改革の組織作りをしていく。また同時にリハビリテーションをスタートさせ病棟を徐々に縮小した。映画の中でも紹介されていたが、オープンドア(開放化)と鎖の廃止、そして病棟を再編

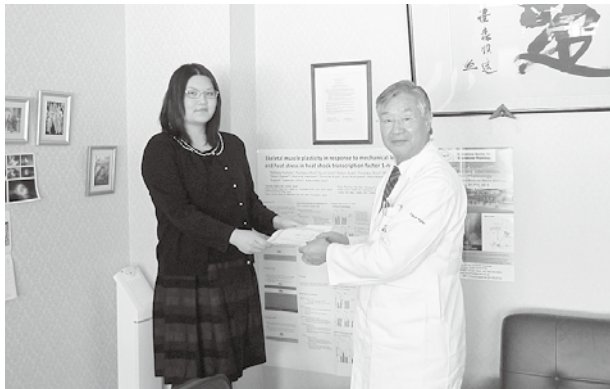


し、表彰状と記念品を贈りました。最優秀賞(エッセイ部門) 09J18 後藤 由紀 「あるようなないような津軽弁——大宰治の津軽弁訳を通して——」

作品は近日発行予定の「稔町リーフレット 第9集」に掲載します。(文学部表現技術コンテスト WG 代表 井上諭二)

表現技術コンテスト

2012~2013



学長から表彰状を受ける後藤さん

文学部では、学生の日本語表現技術の向上を図って、毎年「表現技術コンテスト」を実施しています。レポート、エッセイ、翻訳の3部門について、オリジナルティにあふれ、高い日本語力を示した文章を募集し、最優秀賞を決定します。今年度の募集は1月末日に締め切られ、審査の結果、以下のよう

2012年度

弘前学院大学学位記授与式

- 文学部 第39回
- 社会福祉学部 第11回
- 看護学部 第5回
- 大学院社会福祉学研究科修士課程 第9回
- 大学院文学部研究科修士課程 第7回

◇日時: 2013年3月19日(火) 午前10時~
◇場所: 弘前学院大学体育館

卒業礼拝

◇日時: 2013年3月18日(月) 午前10時~
◇場所: 礼拝堂
*礼拝終了後、体育館において学位記授与式のリハーサルを行う

看護学部第五回卒業研究発表会

多忙な中での卒業研究

看護学部四年 最上 奨太



看護学部教授 片桐 康雄
看護学部の卒業研究発表会が平成二十四年十二月十五日(土)二つの会場で実施された。今年度は卒業予定者が最も少なく38名である。発表会は前日の発表内容データの入力から、司会、進行など、学生が主体で進められた。一人の学生が二つ以上係を兼務するなど、それなりの苦勞もあつたと思われるが、予定時間通りに無事終えることができた。全ての学生が統合実習や国家試験勉強をすると同様に、約一年近くの時間を費やして「看護研究」の貴重な体験をしたと思われる。

卒業後、病棟で勤務する際に、この頑張りぬいた体験を思い出して、常に「考える看護」をしていくよう願っている。

第5回ヒロガク福祉創造フォーラム

実行委員長(社会福祉学部3年) 齋藤ひかる



第5回ヒロガク福祉創造フォーラムは3回に分けて開催しました。

1回目は10月31日に「震災について考える会」学生が感じた岩手県・宮城県(被災地)と

いうテーマで行いました。渡辺佳央里さん(社会福祉学部2年)には「被災地ボランティアを体験して」岩手県宮古市の姿を見て、「佐藤大貴さん(同2年)には「震災から1年以上たつ被

はどのような行動をとっているのか」などの現状を調査し、また研究方法を検討して、アンケートを作成しました。しかし、「何か」が引っかけり研究を上手く進めていけない状態になりました。自分が研究のテーマとして選んだものが、何のための研究なのか、研究の結果がどのように活かせるのか、その「何か」でした。「何か」を明確に出来ないがために、アンケート内容も満足はいかないものになり、何を聞けばいいのか、何を聞きたいのか分からず、話を合した結果、看護学生を対象に看護学を学ぶことによって生活にどのような変化が生じるかという点に着目し、「看護学の学びが生活行動に与える影響」というテーマに変更して、研究を進めることにしました。前のテーマで四ヶ月が経過した時点でのテーマの変更は大

変でした。しかし、新たなテーマでやることで、より多くの学びが得られると考えました。集中して取り組むようにし自分を鼓舞したこと、指導教員のサポートやゼミのメンバーの協力によって研究を進めることが出来ました。

卒業研究発表会はこの一年近く研究してきた成果を発表する場であり、会場には緊張感が漂っていました。発表の際、緊張して上手くレーザーポインタを使えない、スライドを進めるタイミングがずれてしまうなどの小さなアクシデントはありましたが、全員が無事に発表を終えることができました。

卒業研究を終えましたが、次には国家試験が待ち構えています。四年生全員が一杯の努力をし、合格して卒業できるように頑張っていきたいと思えます。

援体制と自助共助できるコミュニティ形成の必要があり、それを担うのが福祉職であると考察しました。

発表2は「震災ボランティアのあり方について」、東日本大震災では直後から多くのボランティアが活動しており、長期的な人材確保が求められている。一方で、それについては様々な問題があつたことを知り、その実際状況について調べ、震災ボランティアのあり方について考察しました。

発表3の「災害時における要支援者の避難について」では、調査の内容や目的が曖昧だったこと、施設の選出に問題があつたこと、などについて改善が必要と考えました。

学内就職セミナー及び就活祭報告

文学部・社会福祉学部



平成二十四年度学内就職セミナー文学部・社会福祉学部合同の説明会を冬季休業中の一月十一日(金)本学体育館において、一般企業二十九社・社会福祉法人十三法人・官公庁四施設・就職支援業者三社の合計四十九

事業所の参加の下実施した。本セミナーの目的の一つは、昨今就職状況が非常に厳しい中、新規学卒採用予定事業所より採用担当者を引き、学生が就職情報を収集する機会を設けて、学生の就業意識を向上させることとしていた。また、併せて企業が求める人物像を知ることや希望する企業に自らをアピールすることを目指す。なお学生は、二・三・四年生合わせて一〇二名が参加した。

セミナーは、昨年度と同様に、多くの事業所の説明を受けられるように事業所の求める人材像が分かったと回答し、就職意欲の向上や就職活動の第一歩につながったとおっしゃったとおり「共助」が大切だと思えます。今回のお話を聞いて感じたこと、考えたことを何かのかたちで今後生かしていければと思います。お時間を割いて貴重なお話をしてくださって、本当にありがとうございました。

12月19日は「第5回ヒロガク福祉創造フォーラム」第3回震災について考える会」を開催しました。講師は「東日本大震災支援」のケアチームとして「藤代健生病院 デイケア科 精神保健福祉士の鎌田晋氏(弘前学院大学社会福祉学部卒業 2期生)、「東日本大震災を通して考える、福祉職の役割と専門性」岩手県釜石市の経験から」と題して釜石厚生病院 精神保健福祉士の高橋大輝氏(同2期生)にお話し

私には避難所でのプライバシーのない環境はやはりストレスにつながるだろうと思いましたが、互いに励まし合うのは良いことですが、一人になって心を休める時間も必要だと感じました。また、支援者にとっても、一人の人間であり家族がいて親がいて友人がいて、みんな同じようにショックを受け、たくさん抱えていることを忘れてはいけないと感じました。被災者の衝撃的な体験を聞くことが支援者にとっては衝撃的な体験であり、支援者だから大丈夫では決まらずとも覚えてお

の説明を三十分刻みの交代制とした(五回実施)。セミナーは、冒頭から熱を帯び、各ブースにおける企業側の説明に学生が熱心にメモを取り、数々の疑問点などを人事担当者に積極的に質問をしていた。その様子は、就職につながる情報を一言一句たりとも聞き逃さない態度であり、学生の就職に対する意欲を垣間見た瞬間でもあつた。一方、企業側は、懇切丁寧に説明を行い参加学生の疑問点に答えていた。

終了後実施した学生のアンケート(重複回答結果からは約七十%が目指す事業所の情報を得られ、約六十六%が企業側の求める人材像が分かったと回答し、就職意欲の向上や就職活動の第一歩につながったとおっしゃったとおり「共助」が大切だと思えます。今回のお話を聞いて感じたこと、考えたことを何かのかたちで今後生かしていければと思います。お時間を割いて貴重なお話をしてくださって、本当にありがとうございました。



四年生内定者有志主催(通称プラスのメンバー二十一)による就職活動報告会「就活祭」が二・三年生七十二名が参加し体育館において行われた。従来の就職活動報告会は数名の四年生就職内定者が後輩に対して一方的に就職活動の内容を報告する形式であつた。今回は、就職内定した四年生の有志が昨年の経験から従来の形式では後輩に思いが十分伝わらないので、就職セミナーと同様の形式を企画し、就職課が支援して実施した。すなわち、企業側の席に四年生の就職内定者が座り後輩に就職内定へのプロセスを説明する形式である。

実施後の二・三年生のアンケート結果からは、説明が分かりやすく先輩の失敗談を聞くことができ、自分の注意点や面接の対策を具体的に知ることができたことや、実際に就活する際の雰囲気を感じることができたこと、ほぼ一〇〇%が参加して満足していると回答している。

また、次の言葉が「就活祭の全体を物語っている。「先輩のためにここまでしてくれる先輩がいることを誇りに思う」。(就職課